

## アントン・パンネクックとドイツゲン哲学

### 序

今世紀初頭の社会主義運動においてカウツキーの影響  
圏から出発し、やがて評議会共産主義の立場に到達し  
たオランダのマルクス主義者アントン・パンネクック  
(Anton Pannekoek 一八七三—一九六〇年)の歩んだ  
道は、社会民主主義の歴史的分解過程と直接重なり合っ  
ている。そして彼自身、多くの場合運動の最左翼の側に  
あって、この分解過程を押し進めたのであった。彼の発  
展史におけるいくつかの転機はそのことをあざやかに示  
している。

彼は一九〇二年オランダの社会民主労働党に入党し、  
カウツキーとの密接な関係のもと正統派マルクス主義の

### 針 谷 寛

理論家としてアナーキズムと修正主義への批判を展開す  
る。一九〇三年のゼネラルストライキ以後改良主義的指  
導部と急進派の対立が激化して党の分裂に至ると、彼は、  
「西欧における左翼急進派の最初の独立政<sup>(1)</sup>」であるオ  
ランダの社会民主党の結成に加わる(一九〇九年)。こ  
の間、一九〇六年以降カウツキーに招かれてドイツ社会  
民主党の活動に従事する。しかし、一九一〇年の大衆ス  
トライキ論争を機にカウツキー批判に転じ、このかつて  
の急進派指導者の理論を「行動なき待機の理<sup>(2)</sup>論」と断ず  
る。第一次大戦中は、彼はツインメルヴァルト左派に与  
し、ロシア革命に際してはボルシェヴィキを支持し、プ  
ロレタリア独裁とソヴィエト(レーテ)制度を自らの原  
理とする。一九一八年ドイツ革命が始まると、彼の属す

る左翼急進派はスバルタクス団と合同してドイツ共産党を創立する。しかし、左翼急進派は第二回党大会で排除され、一九二〇年ドイツ共産主義労働者党を結成する。

労働者ユニオンを基礎にレーテ共産主義を指向するパンネクックらの運動は、この組織分裂以降、西欧革命の方針をめぐるコミンテルンとの対立を深めていく。

だが、彼の活動を政治的、組織的にあとづけ分析することがこの小論の目的ではない。ここでの主題は、彼がその理論的歩みをおして社会変革の主体的要因に光を投じ、マルクス主義を「プロレタリアートの行動の理論」、

革命的实践の理論として展開しようと試みたことにかかわっている。この点で、彼の理論は、第一次大戦以降ルカーチとコルシュが展開したマルクス主義「再生運動」を先取りしたものであるとも評価されている。<sup>(5)</sup>しかし、マルクスの思惟のヘーゲルの基礎に立ちかえろうとした西欧マルクス主義者の場合と異なって、パンネクックの理論のこうした側面はドイツゲン哲学の受容と密接に関連していた。若き天文学者パンネクックがオランダの社会主義運動に身を投じた時、彼のマルクス主義観においてはドイツゲンの哲学が決定的な位置を占めていた。

例えば一九〇二年、彼はドイツゲンの主著『人間の頭脳労働の本質』の新版に序文を寄せて、ドイツゲンの哲学を、「精神の本質」を解明してマルクス理論の「空隙」を埋めたものと位置づけた。<sup>(6)</sup>さらに後年、彼は、マルクスの社会理論を「補完」するドイツゲンの哲学は「プロレタリアートの闘争にとってますます「実践的意義」を高めていくとも主張した。<sup>(7)</sup>このように位置づけられたドイツゲンの哲学はパンネクックのマルクス主義においていかなる役割をはたしたのであるうか。この点を明らかにすることが本稿の主題である。

パンネクックにとってドイツゲン哲学が方法的意味をもっていたことは、これまでにも——彼自身の言葉に従って——指摘され、また注目されてきた。しかし、そうした関係がいかなる論理構造において成立したかは、パンネクック研究としても、ドイツゲンの影響史としても、いまだ主題的に分析されてはいない。ここでの課題は、第一に、ドイツゲンの哲学がパンネクックのマルクス主義のうちいかなる構造において組みこまれたかを、彼の理論に即して考察することであり、第二に、彼の革命構想の中でドイツゲン哲学の占める位置と意

味を検討することである。そして最後に、ディーツゲンとのそうした関係をふまえて、バンネクックと西欧マルクス主義との一定の比較検討を試みるものが第三の課題である。第二インターナショナルの分解過程で顕在化した諸問題への回答として、殊に自然主義的マルクス主義観の克服の試みとして、両者の方法的関連を検討することは、バンネクックの思想的立場を探る一つの手がかりとなりうるであろう。

- (1) Hans Manfred Bock, *Syndikalismus und Linkskommunismus von 1918—1923. Zur Geschichte und Soziologie der FAUD(S), der AAUD und der KAPD*, Meisenheim/Glan 1969, S. 263.
- (2) Massenaktion und Revolution, in: *Die Neue Zeit*, XXX-2 (1912), S. 591.
- (3) バンネクックの発展史の概要については、Bock, *Zur Geschichte und Theorie der Holländischen Marxistischen Schule*, in: A. Pannekoek, H. Gorter, *Organisation und Taktik der proletarischen Revolution*, hrsg. u. eingeleitet v. H. M. Bock, Frankf. a. M. 1969, を参照。彼の初期オランダ時代から大衆ストライキ論に至る時期に関して論じた文献に、山本秀行「アントーン・バンネクックとブレイメン社会民主党——ドイツ左翼急進主義の形成——」『社会

運動史』第三号(一九七三年)があり、また、同「アントン・バンネクックとカール・カウツキー」『思想』第六三三号(一九七七年三月)は、ディーツゲンの影響にも着目しつつ、カウツキーとの関係を極めて詳細にあらわしている。第一次大戦期以降の彼の活動については、Bock, *Syndikalismus*, a. a. O.; Derselbe, *Geschichte des linken Radikalismus in Deutschland. Ein Versuch*, Frankf. a. M. 1976, を参照。

- (4) Marxistische Theorie und revolutionäre Taktik, in: *Die Neue Zeit*, XXXI-1 (1912), S. 372.
- (5) Bock, *Syndikalismus*, a. a. O., S. 55.
- (6) Die Stellung und Bedeutung von J. Dietzgens philosophischen Arbeiten, in: Josef Dietzgen, *Das Wesen der menschlichen Kopfarbeit*, Stuttgart, 1907, S. 30.
- (7) Dietzgens Werk, in: *Die Neue Zeit*, XXXI-2 (1913), S. 38, 46. この点については、トーマス・ディーツゲンの『みならず』、オランダの党理論誌『ニュー・ウ・チ・ライフ』の編集者クルマン・ホルター、ケンリヒト・ローラン・ホルスタンの共有であった。「ホラント・パンタク主義」とは、この『ニュー・ウ・チ・ライフ』のペンネームと主筆とで与えられた歴史的事実であった。Vgl. Bock, *Zur Geschichte und Theorie*, a. a. O., S. 8. ローランド・ホルスタンは一九二一年以降他の二人から決定的に離れていく。彼女の歩みの概観は、Cajo Brendel, *Einführung*, in: H. Roland-

Holst, *Die revolutionäre Partei*, Berl. 1972. を参照。

### 一 マルクス主義とディーツゲン哲学

ディーツゲン哲学というものをパンネクックはいかなる形で把握していたか、まず、この点から検討しなければならぬ。マルクス、エンゲルスとは独立に唯物弁証法を発見した労働者、というエンゲルスの言葉をとおして幾分神話化されてその名を知られるヨーゼフ・ディーツゲン（一八二八—一八八八年）は、一八六九年、『人間の頭脳労働の本質』を著わしてカント実践哲学に対する批判を含む思惟理論を展開した。のみならず、彼は、一八四八年革命以後マルクスをとおして把握した労働概念を基礎に社会主義思想を展開し、その「資本論書評」（一八六八年）によって運動史上にも特異な足跡を印している。しかし、パンネクックにとっては、ディーツゲンの思想の固有性はもっぱら思惟理論のうちにあった。その限りで、彼のディーツゲン評価は労働概念と社会理論への視点を欠いている。彼がマルクス理論を補完するものと位置づけたディーツゲン哲学とは、こうした「認識論」を指すものであった。<sup>(1)</sup>彼のディーツゲン認識論把握の主

要点を以下で見なければならぬ。

ディーツゲン哲学の前提には、意識は社会的存在によって規定されるという史的唯物論のテーゼがあるとパンネクックは言う。<sup>(2)</sup>このテーゼは——彼によれば——意識の全内容が「環境世界からの影響」であることを主張したものであるが、しかしそれによって意識の固有の意義が否定されたのではない。むしろ、「環境世界の影響が取り入れられ加工される仕方」こそ意識固有の機能にほかならず、ディーツゲンはこの領域を解明したのである。こうした意識の機能で第一に重要なのは、世界の直接的影響である「印象」を集め保持する「記憶」の機能である。そして第二の基本的機能は「抽象」である。これによって多様な印象の素材が一つの抽象的「像」に加工される。そこでは、具体的特殊の現象の「普遍的なもの」が「概念」によって把握される。概念は対象の普遍的、本質的、恒常的なものを表現し、特殊的、可变的、差異的なものを捨象する。こうして概念は本性上現実を「単純化」し「固定化」する。しかし、印象として意識に入りこむ世界の姿は不断に変化し、限りなく多様であるから、概念もまた「静止」することはできず、くり返し変

更され、改造され、置き換えられなければならない。このようにして、それは「変化する現実に適合せしめられねばならない」のである<sup>(3)</sup>。

このように、パンネクックはディーツゲン哲学を、意識の主観的內面的機能を説明したものとして——その限りではディーツゲンの思惟理論に忠実に——把握し、継承する。そして彼はこうした內面的機能のうちに意識の能動性を見る。意識は「外界を映す受動的な鏡」ではない。それは「能動的、活動的なものであり、外部から入りこむものすべてを、ある新たなものに作り直す」。彼にとって、このような能動性を説明した点にディーツゲンの理論の意義があった<sup>(5)</sup>。といつても、このような意識の能動性が直ちに運動主体の能動性と結びつくわけではない。しかしまた、こうした意識の把握は、認識論一般として本来の意味をもったものでもない。彼において認識論の問題は、はじめからマルクス主義の全体構成に組みこまれるべきもの、従つてマルクス社会理論に対する意味においてこそ問題とされるものであり、この関連を離れるなら本質の意味を失うのであった。

ここでマルクス社会理論とは、主要には、行動の理論

と解された「史的唯物論」を指す。彼によれば、史的唯物論は歴史を作る人間の「行動」をその「原因」から説明するものである。人間の行動はその「欲求」と「環境」によつて規定される。しかし、こうした原因は「人間精神をとおして」作用するのであり、行動する人間にとってはその「思惟」が直接の原因である。このような意識を「中間項」とする行動の「因果連鎖」を、社会的欲求と経済的諸関係から把握するところにマルクス社会理論の独自性がある<sup>(6)</sup>。他方ディーツゲンは、「マルクスによつては仕上げられなかった」意識の理論を提供した。その意味で、パンネクックはディーツゲン哲学を、「マルクスの社会理論の地盤の上でのみ」成立しえ、しかも同時にマルクス自身の理論を「補完」したものと位置づけたのである<sup>(7)</sup>。

マルクス社会理論の基礎の上にディーツゲン哲学を位置づけるといふことは、従つて、彼の意識の理論によつて、人間行動に内在する思惟的媒介の構造を捉えることを意味した。それゆえ、問題は単なる対象認識における思惟機能に解消されるものではなく、むしろ実践的意志規定を媒介する思惟こそ真の問題といえよう。だが、バ

ンネクックにとっては、いずれの場合も、思惟の機能自体に変わりはない。そしてそう考える点でも、彼はディーツゲンの思惟観に忠実であった。というのも、かつてディーツゲンは、ほかならぬこの思惟の同一性を視点として、カントの理論哲学と実践哲学の二元性に対する「理性再批判」を試みたからである。そこでは、思惟は——「外界の現象」であれ、「欲求」であれ——「感性」の所与における普遍的なものの把握として、常に同じ機能をはたすものとされた。<sup>(8)</sup> こうした思惟観を受け継ぎつつ、パンネクックは、具体的にはディーツゲンの道徳理論とマルクス主義の階級理論を結びつけることによって、彼なりの実践の論理を構成する。それは同時に、社会主義を倫理的意志によって基礎づける新カント派に対する批判を含むものであった。以下この点を見る必要がある。

価値判断の基礎は「欲求」にあり、これを充足する行動が「有用」な行動である。しかし有用なものが直ちに「道徳的」なのではなく、「普遍的」に有用なものによって行動を規定することが道徳的なのである。こうして道徳的規定の構造も、環境世界の認識の場合と同様に、所与の特殊なものにおいて普遍的なものを把握する「人

間精神の一般的本性から」理解される。道徳のこのような把握によって、カントにみられる「利害と倫理」の対立は、「二種の利害」、すなわち個別的利害と普遍的利害の間の対立に還元されることになる。<sup>(9)</sup> ところでこうした普遍性は、何らかの内容をもととすれば、「相対的」にしか成立しない。パンネクックは利害の普遍性の限界を階級においておさえる。彼によれば、文明社会の道徳は「階級利害の表現」以上の普遍性をもちえない。しかし、商品形態によって覆い隠された社会的労働過程が洞察されないと、階級利害も、そのままの形では道徳の尺度として妥当するに至らない。むしろ、そうしたところでは、個別的利害との対立において浮かび出る「普遍的階級利害」は、何らかの絶対的形式の仮構において「永遠の妥当性」を付与されることによってのみ、その階級の諸個人に認識されうる。このような利害超出、欲求否定を典型的に表現したものがカントの道徳理論である。それは、道徳の普遍性を経験的なものの彼岸に成立させるため、理論哲学では空虚な概念である「物自体」を「第二の世界」として自立化させたのである。<sup>(10)</sup> このように見ることによって、パンネクックは、「物自体」

の概念を、単なる可想体を意味する空虚な概念として実践の把握から抹殺し<sup>(11)</sup>、プロレタリアートの実践を、この階級の普遍的階級利害の認識に基づく意志規定として把握したのであった。

以上見た限りでは、バンネクックの主張するディーツゲン哲学の意義は、マルクス主義の理論的体系性にかかわるものであった。すなわち、それによって、意識を媒介項とする行動の円環が十全に把握され、「実践的人間」に関する理論が可能になるということである。<sup>(12)</sup>（この行動の理論が彼の革命構想にどのような帰結をもたらしたかは、次節以下で見ることになろう。）マルクス主義の倫理的補完と宿命論的把握との対立が展開しつつあった二十世紀初頭の運動においては、たしかにそうした理論的意義は同時に「実践的闘争」としての意義<sup>(13)</sup>でもあったであろう。だが、その限りではまだ、思惟理論それ自体から運動論上の規定が取り出されたというわけではない。注目されるべきは、彼がこれにとどまらず、ディーツゲン哲学から直接運動論的帰結を導き出すに至ったことである。すなわち、彼は、ディーツゲンの思惟理論を社会的現実に関してさらに展開することによって、プロ

レタリアートの意識化の阻害要因を認識論的に把握しようとした。この問題を次に検討しなければならぬ。

彼のそうした展開の糸口となったのは、ディーツゲンの思惟理論をおしてつかまれた意識の変化と固定化の問題である。まず、意識の変化の側面について見るならば、変化をおして現実に適合する意識の働きは、自然科学的認識の場合も、社会的現実に関する場合も基本的相違はない。だが、社会においては、世界に関するわれわれの経験のみならず、「世界そのものが激しく変化する」。従って、意識の変化は不可避免となり、「意識はこの不断の変形過程の中で、社会的存在に適合する」ことになる。<sup>(14)</sup>他面、意識には固定化の要因もある。そうした要因として、彼は次のような点を挙げる。概念は元来固定的な性質をもつ。だが新たな印象が既成の概念と合致するならば、その概念は一層固定的なものとなる。固定化要因は主観的なものだけではない。「社会的共同生活」においては「観念の不断の交換」がおこなわれ、観念的「像」は「集団的所有物」となって個人を超えた持続性を得る。こうして一定の社会的妥当性と固定性を獲得した観念の体系（「イデオロギー」）は、伝承されることに

よってますます確固たるものとなる<sup>(15)</sup>。

このような把握をふまえ、彼は「伝統の力」という問題を提示する。すなわち、社会的現実が変化したにもかかわらず固定化した意識がなお存続する事態を、彼は意識の伝統化として捉える。彼によれば、伝統は、一般にすべての意識形態がそうであるように、現実の一部を構成する。だが、伝統をして伝統たらしめているのは、その意識の「物質的根源が過去にある」こと、従ってそれが現実の一部を成すといっても、現在の現実のうちには自己の対応物をもたぬ「純然たる精神的性質の現実」として存立することである。それはもはや現在の現実にも「適合」していかぬにもかかわらず、強固な持続力をもって「人々の頭脳のうちに生き」、その行動の決定に関与する。この伝統化した意識の規制力考慮に入れるなら、意識が社会的存在によって規定されるというテーゼは、ある一時代の意識がその時代の物質的現実によってのみ規定されるという意味に解されてはならない、と彼は言う。伝統という「観念的要因」が——そしてこれを介して過去の現実が——、その時代の新たな現実と共に、人々の意識を規定するからである。伝統の概念をともし

て彼が示そうとしたことは、ひとくちに言えば、意識は社会的現実「常に遅れる」という問題であった<sup>(17)</sup>。人々の意識は、意識の中でおこなわれる、新たな現実からの所与と旧来の観念との闘争、調停、改変をとおして、伝統を克服することによってのみ、現在の現実と適合しようというのである。

意識伝統化の概念をとおして、思惟理論は運動論と結びつく。彼によれば、社会革命は資本主義の矛盾の展開に客観的基礎をもつ。だが、そうした矛盾の発展は革命を「自動的に惹き起こしはしない」。この革命は、自己の普遍的階級利害を意識し意志に高めたプロレタリアートによってのみ担われる。ところが、プロレタリアートの意識のうちにも伝統は滲透する。階級利害の意識化はこの伝統的意識の克服なしには達成されない。ここにおいて、「プロレタリアートの深い精神的変革」が社会革命の条件として提起されることになる<sup>(19)</sup>。パンネクックにとって伝統の克服という問題は階級の意識化の問題にほかならないのである。

彼がプロレタリアートの意識における伝統の克服を論じる時、伝統とは、決して「前近代的」意識に限定され

たものではない。むしろ、「ブルジョア・イデオロギー」そのものが、克服されるべき伝統としてつかまれる。プロレタリアートの階級闘争を尺度として諸々の意識形態を測ることにより、彼は「宗教」をはじめとして「ナシヨナリズム」、西欧的「ブルジョア文化」、さらには社会民主党の「議会主義」的戦術観に至るまでを、伝統イデオロギーとして把握した。<sup>(20)</sup> 例えば、「民族的なもの」は、彼によれば、生成期のブルジョア社会の産物であり、ナシヨナリズムは「ブルジョア・イデオロギー」である。だがブルジョアジーとプロレタリアートの「階級対立」の展開によって民族的共同性は解体していく。民族的意識はブルジョアジーにとっては生きた現実であるが、「プロレタリアートの生きた諸関係」にはもはや根差しておらず、それゆえに、「プロレタリアートにとっては伝統という意味しかもたない」とされる。<sup>(21)</sup> ここに見られるように、彼は、プロレタリアートの意識が「適合」すべき「現在の現実」を、ブルジョア社会の総体としてではなく、プロレタリアートの階級利害としてつかむ。これに照らす時、ブルジョア・イデオロギーすら「過去」的なものと把握される。このようにして、彼は、階級の

意識化の問題を伝統的意識の克服の問題そのものとして把握したのであった。

マルクスは意識が存在によって「規定される」という命題を確立したが、ディーツゲンは、「いかに」それが規定されるかを、意識固有の能動的機能に即して解明し、これによってマルクスを補完した、——このようにバンネクックは述べる。<sup>(22)</sup> だが、彼にとって、思惟のこのような能動性一般の解明が直ちに現実変革の主体性の解明であったのではない。運動論とのかかわりで見るならば、彼にとってディーツゲン哲学の意味は、思惟のこうした能動性にもかかわらず——あるいはむしろ能動性ゆえに——いかに意識は存在によって十全には規定「されず」、現実に適合「しない」可能性を孕むものであるかを、思惟の内面的機能そのもののうちに提示した点にあったといえよう。そこからバンネクックは意識の伝統化の問題を展開した。この伝統化の構造把握をとおして、思惟理論は、プロレタリアートの主体化の阻害要因を認識論的に解明し、その克服の必要性と方向を提起する方法となつたのである。

(一) Dietzgens Werk, a. a. O., S. 40. ディーツゲンの社

- 会理論および今世紀初頭のディーツゲン像に關しては、拙稿「ディーツゲンの社会理論とカント批判(1)・(2)」『橋研究』第六卷第四号、第七卷第二号、参照。
- (2) Ebenda, S. 39.
- (3) Der historische Materialismus (1919), in: Anton Pannekoek, *Neubestimmung des Marxismus 1. Diskussion über Arbeiterräte*, eingeleitet von Cajo Brendel, Berlin 1974, S. 40—42.
- (4) ディーツゲン自身の所論として、例を以て Joseph Dietzgen, *Das Wesen der menschlichen Kopfarbeit. Darstellung von einem Handarbeiter. Eine abermalige Kritik der reinen und praktischen Vernunft*, Hamburg 1869, S. 17—18, 20—21, 27—28, 32. 森田健記「一八一—一九、三一—三三、三八—三六、四三頁」参照。
- (5) *Klassenkampf und Nation*, Reichenberg 1912, S. 14.
- (6) Der historische Materialismus, a. a. O., S. 31, 36—37, 39.
- (7) Dietzgens Werk, a. a. O., S. 38—39.
- (8) Vgl. Dietzgen, *Kopfarbeit*, a. a. O., S. 93—95. 前掲「論考」100—101頁。その或は、その前に前掲註を参照。
- (9) *Ethik und Sozialismus. Umrissungen im Zukunftsstaat*, Lpz. 1906, S. 20—24.
- (10) Die Stellung und Bedeutung, a. a. O., S. 27, 3—4, 14, 11.
- (11) 「人間精神はカントの言う現象体に完全に組み入れざる。… 思想体はそれを存在しなす」(Ebenda, S. 15.)、と彼は断つる。
- (12) Vgl. Marxismus und Teleologie, in: *Die Neue Zeit*, XXIII-2 (1905), S. 435.
- (13) Dietzgens Werk, a. a. O., S. 46.
- (14) Der historische Materialismus, a. a. O., S. 43.
- (15) Ebenda, S. 42.
- (16) Ebenda, S. 43—45. 彼はカントした把握の前提として、意識の現象性に関するディーツゲンの見解を重視した。Vgl. Marxismus und Idealismus (1921), in: *Neubestimmung*, a. a. O., S. 22—23.
- (17) Marxismus und Idealismus, a. a. O., S. 25.
- (18) *Die taktischen Differenzen in der Arbeiterbewegung*, Hamburg 1909, S. 9—12.
- (19) Marxistische Theorie, a. a. O., S. 371.
- (20) Vgl. Der historische Materialismus, a. a. O., S. 45; Weltrevolution und kommunistische Taktik (1920), in: *Organisation und Taktik*, a. a. O., S. 133; Marxismus und Idealismus, a. a. O., S. 25—26.
- (21) *Klassenkampf und Nation*, a. a. O., S. 36, 39, 21, 35.
- (22) Dietzgens Werk, a. a. O., S. 39.

## 二 意識と革命

パンネクックの革命構想において意識の理論がどのような位置と意味を有したかを検討するためには、彼の時代認識と革命観を、せめてその骨格だけでも見ておかなければならない。彼の革命構想はロシア革命／ドイツ革命期のレーテ共産主義の選択において一定の変化を示すに至るが、ここでは主として、カウツキー批判を間にはさむ一九〇九年以降、ドイツ革命以前の時期の見解について見る。

彼によれば、革命とは「階級間の権力関係の交革過程」である。<sup>(1)</sup> 社会主義は階級闘争の「究極目標」であり、運動の直接的目標は階級の「権力の増大」でのみありうる。国家機構はブルジョアジーの権力の要因をなし、労働者階級はこれに打ち克ちうるところまで自己の権力を形成しなければならぬ。ブルジョアジーの権力に対抗して形成されるプロレタリアートの権力の要因は、①その数、②階級意識、③組織にある。そして階級闘争の「戦術」の基準は、労働者階級の権力をいかに増大させるかにある。<sup>(2)</sup>

このようなプロレタリア革命論に立って、彼は階級闘争の発展史に段階区分を設ける。第一期は一八四八年から七一年まで、そして第二期は一八七一年以降の「議会議の時代」とされる。この第二期の闘争は、ブルジョアジーの支配の安定により、やむなく議会と労働組合を主要な形態とした。議会は「ブルジョアジーの支配の標準的形態」であり、プロレタリアートにとって「権力の増大」の手段にはなりうるが、政治的支配の獲得に導くものではない。労働組合は、その課題においては「資本主義を超えない」が、プロレタリアートにとって「自然的組織形態」をなす。だが、今や始まりつつある第三期において、資本主義の平和的発展は終焉し、権力への「漸進的上昇」に替わって「支配を争う闘争」が課題となる。議会議義期には分離していた闘争の政治的形態と経済的形態が今や融合し始め、労働組合という大衆組織による政治的ストライキが出現し、「大衆の力」が闘いの帰趨を決するものとなる。<sup>(3)</sup>

こうした段階論の見解において決定的に重要なのは、「第三期」がすでに開始したと彼が認識していたことである。このことは、彼の革命論が、社会民主主義の従来

の運動からの一つの戦術転換として構想されたことを含意している。この点を明確にするために、さらに彼の時代認識の特質を見る必要がある。

大衆ストライキを生み出した第三期——一九〇五年以降——を、彼は(一九一二年以後明示的に)「帝国主義」の概念で把握する。資本主義の新たな段階をなす帝国主義は、世界政策、軍備、税の重圧、内政反動化、物価騰貴の諸現象を伴い、その結果、生活防衛の衝動に駆られた「大衆自身」による、議会や組合の合法性の枠を超えた自発的政治行動を生じさせる。<sup>(4)</sup> その意味で「帝国主義の時代とは……大衆行動の時代」である。<sup>(5)</sup> このような把握によって、彼はこの時期を資本主義の一発展段階と位置づけ、大衆行動という新たな闘争形態に客観的基礎を与えようと試みたのである。

だが彼の時代認識の一層重要な特質は、この時期を、「支配を争う闘争」の時期、権力の移行期と捉える点にある。このことは、彼にとって、「行動」に意味転化が生ずることを意味した。彼によれば、マルクス主義の行動観のうちには本来二つの契機が統一的に含まれている。第一は、人間が行動において「物質的諸関係によって規

定される」ことであり、第二は、人間が行動によって「みずから歴史を作る」ことである。ところが、この本来統一的なマルクス主義の両契機は「発展過程の中で異なる強調を受け取る」、と彼は言う。ブルジョアジーの支配が安定し、いまだ支配の獲得をめざさない議会主義期には、「状況をして成熟せしめよ」を合言葉に、マルクス主義は「経済的決定論」とならねばならなかった。これに対し、プロレタリアートが大衆行動をとおして世界に介入し、「世界を変更」する行動が日程にのぼる時、マルクス主義は「プロレタリアートの行動の理論」となるという。<sup>(6)</sup> すなわち彼は、革命的行動が現実的課題となつた時代としてみずからの時代を把握したのである。

大衆ストライキ戦術をめぐる対立に端を発したバンネクツクのカウツキー批判も、こうした彼の時代認識に根差すものであつた。<sup>(7)</sup> 闘争の議会主義段階と大衆行動段階という段階区別。そしてマルクス主義の——経済的決定性と歴史創造的能動性という——内在的二契機の、この二つの段階への振り分け。そこから導き出される、今や新たな現実には「適合」せねばならぬという主張。ここに、彼のカウツキー批判の構造がある。彼はカウツキーの戦

術を、議会主義期には不可避であったが、今では時代に適合しなくなった「伝統」イデオロギーと位置づけたのである。

そしてそのような時代認識から、意識の理論の実践的意味も導き出されたのである。彼は、「支配を争う闘争」が発展し、「マルクス主義の能動的側面」が前面に押し出されてくると、ディーツゲン哲学の実践的意義はますます高まる、と主張する<sup>(8)</sup>。前節で見たように、彼にとって、人間行動はいつでも意識に媒介されたものである。

しかし、そのことは意識の実践的意義が常に同じであることを意味しない。権力移行期の革命的行動においては、意識は歴史を作る能動性に現実的に関与し、世界の歩みは人々の自覚的意志のいかんにかかってくる。そして、意識が現実の中でそうした決定的役割をはたしうる時代に入ったからこそ、意識の理論もまた決定的な実践的意味をもつ、と彼は考えたのである。

だが彼の場合、そのような、行動と意識の意味転化にもかかわらず、意識と行動の関係そのもの、意識化の構造自体は変わらない。彼は革命的行動を行動一般から区別するものを階級意識に見る。しかしそのような区別の

根拠は意識化の構造自体にあるのではない。彼にとって、人間行動は一般に欲求の意識化を媒介項とし、その点では、「社会変革の意味での行動」<sup>(9)</sup>も異なる構造をもつものではない。プロレタリアートの行動が革命的な、すなわちブルジョア社会を「超える」行動となりうる根拠は、その階級利害の独特の性格にある。彼らの階級的「利害」そのものが本質的に資本主義の廃止と社会主義的変革を必要とするからこそ、この利害の意識化が革命的行動を導きうる<sup>(10)</sup>。たしかにプロレタリアートの利害は個別的には常にブルジョア社会の克服を指向するとは限らない。しかし階級の普遍性においては、それは革命的ならざるをえない。そしてこの階級の利害に立脚する限り、意識化自体は、個別的なものの把握から普遍的利害の把握へと、原理的には連続的に進みうると解されたのである。それゆえにこそ、彼は、革命における意識の理論の実践的役割を、意識化の阻害要因を提示し、その克服方向を指示するという点に見出しえたのである。

意識化の過程は、伝統的意識の克服による新たな現実——「新たな社会」を指示する階級利害——への適合、という経験的な道をとる。彼によれば、闘争の中でのみ

「幻想と偏見」の克服が可能となり、マルクスの提供した「社会の科学」でさえ、「闘争の成果」としてのみ認識されうる。<sup>(11)</sup> というのも意識の変化の基礎は「経験の変化」にあり、新たな現実が毎日にその印象を意識に刻みつけることによってのみ、古いイデオロギーは風化するからである。そして「急激な変化の時代」には、精神は躍動し、古い観念を一層速やかに捨て去るとされる。<sup>(12)</sup>

このような経験的方向性において、意識化は諸個人の変化の問題として把握される。そして意識化のこうした把握それ自体、彼の革命構想、とりわけ権力移行期に関する彼の構想と不可分のものであった。彼によればプロレタリア革命は長期にわたる過程である。といってもそれは、国家機構をまず掌握し、次にこれに立脚して合法的に遂行される社会化の過程が長期的だという意味ではなく、むしろ、大衆行動と組織の構築によって国家機構を「麻痺させ突き崩す」過程そのものが長期的なのであり、その途上の「転回点」として権力の移行が生じるのだと想定される。<sup>(13)</sup> 彼は革命過程を、プロレタリアートの権力の下からの形成と大衆諸個人の変化の進展に依じてブルジョア国家が掘り崩されていく過程と考え、従って、

その過程の終局において、「自己の運命を明確な意識をもって規定する、統治能力を有する、高度に組織された大衆」が生産組織を掌握するに至ると言う。<sup>(14)</sup> 彼のこのような革命構想の中では、プロレタリアートの意識の変革、階級の意識化は、社会革命の単なる必要条件の一つとしてではなく、むしろこの革命過程そのものとして把握されたのである。

下からの権力構築と新たな人間の形成を原理化したこのようなバンネクックの革命観は、ドイツ革命期以降の彼のレーテ思想に直接つながるものである。と同時に、そこには一定の変化もあり、以下ごく簡単にではあるがその点に触れる。<sup>(15)</sup> ウニオニスム運動を基盤とした彼のレーテ共産主義は、プロレタリア独裁とレーテ制度を革命の二つの原理とする。彼によれば、抽象的に平等な「公民」の擬制に基づく議会制度は、異なる階級に属する人々の共通利害を代表する制度ではありえない。これに対し、レーテ制度は、人間を共同的たらしめる「労働とその組織を……あらゆる政治生活の基礎とする」。労働組織内部で編成される代表制度のうちに「ブルジョアジーの占める位置はない」。共同労働によってのみ共同

決定権が生ずるからである。こうして、彼はレーテ制度を、プロレタリア独裁を「自動的」に成立させる組織であり、「自主管理と下からの組織化」に基づく、「官僚制を伴わぬ国家組織」であると性格づける。<sup>(16)</sup>

このような組織は、自立した精神と連帯心に溢れ、「労働を自主的に統御しうる新しい人間」<sup>(17)</sup>によってこそ支えられる。彼にとつて、革命過程とはこのような人間の形成過程でなければならなかった。だがこうした見解そのものは革命前の彼の革命観にも含まれていた。むしろ、かつては大衆行動と、それを担うべき労働者組織とが、意識化の場として模索されたのに対し、レーテ構想においては労働組織そのものに下からの意識化の場が見出されたこと、ここにこそ彼の構想の基本的な変化を見なければならぬ。そしてその限りに於いて、彼のレーテ思想はディーツゲンの社会主義観との共通性を示すことになった。というのも、ディーツゲンは労働の共同性の意識化として社会主義を構想したからである。<sup>(18)</sup>

しかし、すでに見たように、ディーツゲンに対する彼の自覚的な方法的関係は、思惟理論に限定されている。そしてディーツゲンから把握した意識の理論は、レーテ

共産主義者となった彼においてもなお原理的な意味をもち続けた。西欧革命の困難さの原因をブルジョア文化の「伝統」の根強さのうちに見た彼は、そこから、いかに「速やかに権力を獲得する」かではなく、「プロレタリアートのうちに階級の持続的権力の基礎をいかして形成するか」<sup>(19)</sup>という意味で、意識形成の問題をあらためて提起していくのであった。

- (1) Marxistische Theorie, a. a. O., S. 273.
- (2) *Die faktischen Differenzen*, a. a. O., S. 13—20.
- (3) Ebenda, S. 68—73, 88—93, 104—105.
- (4) Massenaktion, a. a. O., S. 541—542.
- (5) Der Imperialismus und die Aufgaben des Proletariats (1916), in: *Organisation und Taktik*, a. a. O., S. 94.
- (6) Marxistische Theorie, a. a. O., S. 371—372.
- (7) この論争については前掲山本秀行「アントン・パンネクックとカール・カウツキー」参照。
- (8) Dietzgens Werk, a. a. O., S. 46—47.
- (9) Der Marxismus als Tat (1915), in: *Neubesinnung*, S. 20.
- (10) *Die faktischen Differenzen*, a. a. O., S. 12.
- (11) Ebenda, S. 26—27.

- (12) Der historische Materialismus, a. a. O., S. 46.  
 (13) Sozialdemokratie und Kommunismus (1919), in: *Neubestimmung*, a. a. O., S. 64—66.  
 (14) Massenaktion, a. a. O., S. 550.  
 (15) 「レーテ共産主義について」本稿では彼の運動史的側面には全く触れられぬが、この点は「Bock, *Synakalismus*, a. a. O., V, VIII; Peter von Oertzen, *Barriereaktivismus in der Novemberrevolution*, 2. Aufl., Berl. Bonn-Bad Godesberg 1976, 8. Kapitel, 等」を参照せよ。  
 (16) Sozialdemokratie, a. a. O., S. 72—75.  
 (17) Ebenda, S. 63.  
 (18) 「レーテ共産主義の社会主義観にレーテ思想の萌芽を見る」『G. V. W. Wilfried Gottschalk, *Parlamentarismus und Räte-demokratie*, Berl. 1968, S. 9; Hellmut G. Haasis, Nachwort, in: Joseph Dietzgen, *Das Wesen der menschlichen Kopfarbeit und andere Schriften*, Darmstadt u. Neuwied 1973, S. 185, 188. 参照。  
 (19) *Weltrevolution* (1920), a. a. O., S. 134.

### 三 バンネクックと西欧マルクス主義

バンネクックにおいてディーツゲンの哲学は、階級の意識化の課題を提起し、マルクス主義を革命的行動の時代における実践の理論として把握するための方法であつ

た。そして第二インターナショナルにおけるマルクス主義の「宿命論」と「修正主義」への両極分解に対する批判<sup>(1)</sup>を含む彼の問題把握には、一九二〇年代の西欧マルクス主義者のそれとの共通性を見ることが出来る。例えばルカーチも、みずからの時代を、「プロレタリアートの階級意識」のいかに人類の運命がかかっている時代と捉え<sup>(2)</sup>、マルクス主義の実践概念の再建をとおして両極分解の克服に向かった。しかし、問題意識における一定の共通性にもかかわらず、両者の間には方法的に大きな隔たりも存在する。以下ではルカーチを中心に、西欧マルクス主義とバンネクックとの対比的検討を試みる。

すでに見たように、バンネクックはプロレタリアートの意識化の阻害要因を、意識の伝統化という点に認識論的に把握した。そして彼はそのような伝統的意識の觀念的存立構造を理解する上で、意識の現実性に関するディーツゲンの見解の意義を強調したのであった。ところで、彼が「伝統」概念によって把握した非プロレタリア的意識、とりわけブルジョア的意識形態は、たしかに、プロレタリアートの「真の」利害に照らして見るならば「過去」的なものと把握されうるかもしれない。しかしそれ

にもかかわらず、それは、ブルジョア社会の固有の意識構造に属する限りでは、思惟のみによっては揚棄しえないものである。従って、この場合、意識の「現実性」の真の問題は、ブルジョア社会の物質的諸関係そのものが「そうした意識諸形態なしには現実存立しえない<sup>(3)</sup>」という形で、意識が現実の構成要素をなす点にある。

ルカーチは意識化を妨げる認識論的要因を、ブルジョア社会における物化がプロレタリアートの意識に滲透することに<sup>(4)</sup>見た。そこでは、プロレタリアートの意識の直接的形態は、純然たる観念的存立としてではなく、社会構造の固有の構成要素として把握される。そして単に意識内在的には克服しえない物化の中にありながらなおそれを超えていく道を、彼は、直接態を総体性に関係づけ、究極目標と直接的現実の媒介を「戦術」として特殊化し、こうして思惟的克服が同時に実践的変革となることに求めた。彼のこうした見解は両極分解に対する方法論的批判に基づいていた。彼によれば、科学と倫理、運動と究極目標の分離把握の方法的根拠はカント哲学に理論的に表現されている<sup>(5)</sup>。それは根本的には思惟と存在の二元性の問題であり、カントはこれを現象と物自体の二元性に

移しかえ、固定化したのである<sup>(6)</sup>。思惟と存在の二元性は、ルカーチによれば、主体と客体の二元性の「特殊事例」として、主客の根源的同一性から把握されねばならない。これによってのみ、総体性が方法的に把握可能になるというのである。

一方パンネクックは(そしてディーツゲンも)、第一節で見たように、カント倫理学に対する批判において「物自体」の概念を単なる空虚な概念として抹殺することによって二元論を克服せんとした。しかしながら、物自体を除去してみても思惟と存在の二元性は依然として存続する。そもそもカントにおいて物自体とは理論における総体性把握の断念の対応物、あるいはそうした断念の表現にほかならない。従って、理論そのものの構造が変わらない限り、総体性把握もまた成立しえないことになる。パンネクックにおいては、実践は、ブルジョア社会を超え、世界を変革し、歴史を作る革命的行動として提起され、そこにはたしかに行動の意味の転化があった。しかし、この実践を媒介すべき階級利害の意識化は、総体性把握とは異質の、感性的所与における抽象的普遍的把握に求められた。それゆえに、革命的实践も、このような

利害の普遍性によって規定されるべきものとして、行動一般と異なる構造をもちえなかつたのである。

パンネクックにおいて、実践を支える意識化が現実への「適合」としての、階級利害の認識と規定される時、適合されるべき「真の」現実<sup>(9)</sup>は労働者階級の、「科学によってのみ認識可能な、深い、永続的な、普遍的利害」であるとされ、個別的なものは普遍的なものに従属し、克服されるべきものとなる。個別的利害は、同質的に、普遍的利害につながり、直接性の意識内在的克服をとおしてすべてが革命的な階級利害に還流すべきものと同かまれる。その結果、そこでは個別的利害と普遍的階級利害、さらに人間的欲求等の存立の位相が構造的に関係づけられることはなかつた。意識化の漸進的連続的把握と同様に、運動の発展も、同種の連続性において把握される。社会主義に至る革命過程において、運動の直接的目標と究極目標とは「対立せず」、権力の不断の増大という目標のうち「究極目標はすでに含まれている」、と彼は言う。しかし、このような直接態と普遍性ととの量的な、連続性における把握は、両極性それ自体の解消を指向することにより、かえって特定の形態に無媒介に革命的意

味を見ることになつた。すなわち、その直接的形態においてブルジョア社会と絶対的に対立する、大衆自身の自発的行動の出現に——萌芽的ではあれ——階級的自覚の画期が見出されることになつたのである。

マルクス主義における哲学の復興を掲げたコルシュは、マルクス主義を哲学的に「補完」するパンネクックらの試みに対し、彼らが社会主義の哲学的側面に取り組んだことを評価しつつも、そこではマルクス理論それ自体は「哲学的内容を欠くもの」と考えられている、と批判した。<sup>(10)</sup>だが、むしろ問題は、同じく哲学といつても、コルシュやルカーチにとつての哲学とパンネクックにとつてのそれとは、その意味が本質的に異なつていたところにある。西欧マルクス主義者にとつて哲学は理論と実践を媒介する総体的構想であつたとすれば、パンネクックにとつて哲学とは、一つの部分領域と解された意識に関する理論であつた。それは思惟の機能を解明する科学であり、「自然科学としての人間精神の科学」<sup>(11)</sup>であつた。このような哲学観の基礎にあるのは、意識と存在の固定的対置の枠組である。意識と存在の関係を、意識が経済的諸関係によって直接規定される因果関係として把握し、

意識の固有の機能を、「いかに」それが規定されるかに見る彼の見解に、そうした枠組が示されている。それにもかかわらず彼は「伝統」概念をとおして、意識形態の現実的機能を把握しようとした。だが、その場合も、意識と存在の対置の枠は崩されず、それゆえに伝統の意識内在的克服が指向されることになり、かえってブルジョア社会の諸形態に足がかりをもちえなくなる結果を生じたのである。そして戦術の変化を現実の変化によって基礎づける彼の見解も、カウツキー批判における「伝統」イデオロギー論に示されるように、意識と存在、戦術と現実をきわめて直接的に対置、対応せしめることによつて、戦術変化の無媒介性を帰結することになった。このように見えてくると、意識と行動を掲げて自然主義的マルクス主義観の克服を企図したパンネクックの見解それ自身、本質的にはそうした自然主義的見解の基礎を離れていないといわねばならない。第二インターナショナルのマルクス主義が、方法的に、究極目標と運動、世界的意味と事実状況の両極分解のうちにあつたとすれば、それを克服しようとしたパンネクックもまた、こうした両極の現実的媒介への視点をもちえなかつた限り、その枠

をぬけ出ることとはできなかったのである。

西欧マルクス主義との方法的対比において見る時、ディーツゲン哲学に基づくパンネクックの意識の理論は、その主観主義的性格を明示することになった。そしてそれが彼の意識観からの理論的帰結であることもたしかであらう。しかしながら、それを単なる理論的帰結とのみ見ることはできない。彼の意識の理論は、意識化を階級の諸個人に即して追求する方法的選択と結びついていた。その限りでは、総体性に基づく媒介といえども、それが諸個人のうちで把握され、担われるのでなければ、彼にとっては意味をもちえなかつたであらう。そして経験的な道を固守することによつてこそ、彼は下からの意識化の可能性を追求したのであつた。彼の理論が提起した問題もこの点にあつたといえよう。

(1) Marxistische Theorie, a. a. O., S. 274.

(2) G. Lukács, Klassenbewusstsein (1920), in: G. Lukács, *Tätigkeit und Ethik. Politische Aufsätze I. 1918—1920*, hrsg. v. J. Kammler u. F. Benseker, Darmstadt u. Neuwied 1975, S. 213. 池田浩士訳『ルカーチ初期著作集』第三巻、一二六頁。

(3) K. Korsch, *Marxismus und Philosophie*, hrsg. u.

- eingeleitet v. E. Gerlach, Frankf. a. M. 1966, S. 128. 井・國崎訳一二〇頁。
- (4) Lukács, a. a. O., S. 216. 前掲訳書一三〇頁。
- (5) Lukács, *Geschichte und Klassenbewusstsein*, Darmstadt u. Neuwid 1970, S. 110. 城塚・古田訳八七頁。
- (6) Ebdenda, S. 343. 同前' 三三三頁。
- (7) Ebdenda, S. 227. 同前' 一一一七頁。
- (8) *Die lakitschen Differenzen*, a. a. O., S. 131.
- (9) Ebdenda, S. 20.
- (10) Korsch, *Marxismus und Philosophie*, a. a. O., S. 76. 前掲訳書七〇頁。
- (11) Die Stellung und Bedeutung, a. a. O., S. 7, 22.  
(一橋大学大学院特別研修生)